

図書館だより ～ 今月のおすすめ本 ～



世界遺産をもっと楽しむための西洋建築入門 鈴木博之

ヨーロッパ旅行の楽しみの1つでもある建築めぐり。パルテノン神殿、ヴェルサイユ宮殿、サグラダ・ファミリアなど、ギリシャ建築からモダニズム建築まで、時代を追って西洋建築の様式の特徴とその魅力について紹介します。(東)

山岳気象予報士で恩返し 猪熊隆之

著者は、世界の名峰を目指す登山家たちを陰で支えている山岳気象予報のエキスパート。

山と海の気象の違いと共通点、気象で見ていく危ない山、意外な山、そして生死にかかわる自身の体験などをつづります。(西)

詳しくは、東図書館 ☎ 62・0190
西図書館 ☎ 75・5406) へ。



ドクターTのひとりごと

その⑧「私が選んだ 舞鶴市10大ニュース」

新年明けましておめでとうございます。年頭にあたり、昨年に続き、平成25年の本市10大ニュースを発表します。ニュースの選び方は昨年と同じで、市役所の12部課において、それぞれの担当部署での重大ニュースを選定し、集められた113のニュース(重複含む)から、私自身が舞鶴市10大ニュースを選びました。その結果、①舞鶴市市制施行70周年記念式典開催(海上自衛隊舞鶴音楽隊と海上保安庁音楽隊ジョイントコンサート実施)②舞鶴イメージソング制作③台風18号襲来(市内に甚大な被害発生)④「海フェスタ京都」2014年開催地に決定⑤大型クルーズ船頻りに寄港(クルーズ元年)⑥舞鶴地域医療連携機構設立⑦新たな由良川水系河川整備計画策定⑧第24回日口沿岸市長会議開催⑨キリンビバレッジ撤退⑩第67回全国茶品評会で昨年に続き連続で産地賞1位。以上となりました。自然災害と企業撤退の暗いニュースもありましたが、その他は市民の皆様に夢や希望を提供できるニュースだと思います。

今年も夢がもてるまちづくりの実現に向けて努力し、来年も素晴らしい10大ニュースを報告したいと思っています。



ごみブクロウの(方法) 『エコな生活ホーホー』教えます!



ごみブクロウ流
「エコな冬生活」

リビングに
家族が集まり
過ごす冬
無駄なく仲良く
省エネ生活

寒い冬に暖房などのエネルギー消費はつきもの。でも、家族みんなが1つの部屋に集まって過ごすなど工夫をすれば、エネルギーの消費を抑えることができるよ。家族団らんで無駄なく冬を乗り切ろう!

《生活環境課》

まいづる花図鑑 89

【ジャノヒゲ】

(ユリ科)
見ごろ 12～1月頃



各地の田畑の岸や山地の林下に生える多年草。根茎から多くのひげ根を伸ばし、ところどころに膨らみがある。葉は根元から群生し線形で長さ10～30㎝。初夏、葉の間に花茎を伸ばし白色か薄紫色の小さな花を総状に付ける。冬、直径7㎝くらいの瑠璃色の種子をつける。別名、リュウノヒゲ。

名前の由来は、葉を「蛇」や「龍」のひげに見立てたことから。昔、子供たちは、この種子を竹鉄砲の弾にして良く遊んでいた。

【協力】

瓜生勝朗 市文化財保護委員(植物分野)

「引き揚げ」の記憶を次世代へ

引揚記念館に展示・保管している海外からの引き揚げやシベリア抑留などに関する約1万2千点の資料の中から、今回は「尺八」を紹介いたします。

シベリアに抑留された人々は厳しい労働や極度の食糧難など、過酷な環境を耐え抜くためにスプーンや麻雀牌の制作、嗜好品の摂取などさまざまなものに精神的なよりどころを求めていました。中には、音楽にそのよりどころを求めていた抑留者もいました。当館に展示されている尺八もその一つです。

展示されている尺八は、ある抑留者が16歳の時に自作して独学で学び長年演奏した大変愛着のあるものでした。そのため、出征する際にも、友人や知人から送られた寄せ書きの布に大切に包んで満洲へ渡り、戦地では時折战友の前で演奏していたそうです。その後、旧ソ連との戦闘の時も、シベリアへ連行される時も、脱走を試みようとした時にも肌身離さず数々の苦難を共にしてきました。

抑留生活を送っていたある日、収容所で最も厳しいソ連兵がやってきて、一曲演奏するように言われ「松前追分」を演奏したところ、哀愁漂うその曲に「よ



▲抑留者の心を和ませた「尺八」

ろしい、いい曲だ」と優しく声をかけてくれたそうです。また、収容所内で開かれた演芸会では、板切れを集めて作った三味線と一緒に演奏したり、講談の囃子として演奏したりして、多くの抑留者を心から喜ばせました。

この尺八は、持ち主と共に幾多の困難と国境の壁を乗り越えながら、日本人抑留者の励みになったばかりではなく、ソ連兵の心をも打ち、さまざまな人々にひとときの「和」という響きを届けてくれたのです。

詳しくは、引揚記念館 ☎ 68・0836) へ。

広げよう人権の輪 ～ アンパンマンの生みの親に学ぶ ～

日本中の子どもたちを夢中にさせる「アンパンマン」の生みの親 やなせたかし さんが昨年10月に94歳で亡くなりました。アンパンマンは、ちょっと汚れたり、ぬれたりしただけでも弱くなり、ジャムおじさんに助けを求めます。でも、いざというときには、自分の顔をちぎって食べてもらうなど、今までにないキャラクターが子どもたちに受け入れられ、日本のみならず世界中の子どもたちから愛されています。

アンパンマンが生まれた背景には、やなせさん自身の戦争体験が大きく影響しています。「正義とは、ミサイルをぶっ放して相手をやっつけることなのか。俺はそうじゃないと思ったのね。本当の正義の味方は、弱いものに寄り添い、自らを犠牲にして子どもを助ける人だ」とある雑誌のインタビューで話されています。

先の大戦でやなせさんは、人間魚雷の特攻隊員だった弟さんを亡くされました。敗戦をきっかけに正義とは何かを考え、その答えが「アンパンマン」のユニークなキャラクターを誕生させました。

やなせさんは、東日本大震災の後、体の不調から引退も覚悟されたそうですが、被災地の女の子の「私は地震が来ても少しも怖くない。アンパンマンが来てく

れるから」という手紙を読んで、引退することをやめ、被災地に向けて励ましのメッセージやアンパンマンのポスターを送り続けました。「自分だけのためなら、あきらめてしまうことも、みんなのためなら、力を出し切れる」そうしたやなせさんの想いは、被災された人々や震災により心を閉ざしてしまった多くの子どもたちに、きっと勇気と笑顔を与えたことでしょう。

私たちは、決して一人で生きているわけではありません。さまざまな人が共に生きていくためには、我慢したり、みんなで力を合わせたりしなければなりません。アンパンマンのように、自分の顔を食べさせることはできなくても、困っている人がいたら手を差し伸べ、悲しんでいる人がいたら、元気づけることはできるはず。だれもが弱い人間だからこそお互いに助け合いのできる、そんな社会にしたいというメッセージをアンパンマンは伝えているのではないのでしょうか。

《人権啓発推進室》



◀人権イメージキャラクターの「人KENまもる君」と「人KENあゆみちゃん」の生みの親も、やなせたかしさんです。